小説

Return 2 4 Ever

稲瀬　隆

掌がすこし冷たい。両目はやや遠くを見やっている。その視界の奥、長い廊下の向こう端で、眼鏡をかけ、ピンクのガウンを着た人間が笑顔で、両手を広げ屈んでいる。なぜだかは分からない。全くなぜだか分からぬままに、それが自分の最も頼るべき存在だということを瞬時に理解した。その刹那、**私**は高さ２ｍほどの中空から、這い進む自らの姿を見ていた。この記憶は一体なんなのだろう。

この違和感はその後、再びやってきた。あの時の存在が「ママ」では」「お母さん」と呼ばれ、ときに「まま」とも言われることを認識した。まだ何もしゃべれず、「母」でない若い女の腕（かいな）に抱えられていた頃のことだ。一歳ほどの幼児が自覚した「ここ」とはなんだったのか？それとは別に、少年期の夢で何度か繰り返した、生々しい別人としての体験も脳裏をよぎる

土中で育った蝉の幼虫が羽化のために木を登り、卵から孵った子亀が波打際に向かって這い進み、生まれたばかりの親指ほどのカンガルーが母の育児嚢まで這い登るように、あらゆる命は己の生き延びるすべを「知っている」。それを知る物だけが生き残る。だが、それを知らしめたのは「なに」なのか？【まるで、何かに命じられたかのように】

私は自分の体がゆっくり回っているのを感じていた。こ

こは？

と、突然、まぶたを通してもなお痛いほどの暴力的な光線が網膜を叩き、深い混沌の淵から引き擦り出された。気を失っていたのだろうか。目の前が瞬時に薄暗くなる。視界を覆う透明な球面が暗色に変化したのだ。丸い強烈な光源。それは太陽だった。そして透明な球面は、宇宙服のヘルメット。自分の現状を理解するのに数秒かかった。

ここは宇宙だ。地球の外周で昼側に出た。身体が太陽からの全波長の電磁波に晒されることになった。宇宙服に護られていなければ余命はカウントダウンに入るところだ。装備の計器を確認し、近時の記憶を呼び起こして必死に現況を解釈した。今はかなりの危機的状況にあるようだ。

「緊急事態発生！アーム破損！ガイドロープ破断！！ガイドロープ破断！」

そう叫んで国際宇宙ステーション（ＩＳＳ）にそう緊急通信したのが五十九分前。二人一組で船外に出て、方位計測器：レートジャイロ・アッセンブリの交換作業が終わりかけた時だった。二人の死角から鶏卵大からティッシュ・ボックス大の宇宙ゴミ、金属デブリが高速で飛来し、衝突した。ＩＳＳの飛行速度が秒速７．７ｋｍなので静止したものでも衝突エネルギーは膨大だ。船外活動装置（ＥＭＵ）いわゆる宇宙服の強靭な素材も高速衝突で切り裂かれた。直撃を受けたバディー（相棒）の肉体は真空の中で瞬時に膨張、破裂して飛散。彼は絶命した。私は幸か不幸か、体を固定していたロボットアームが破壊され、命綱が切れただけだったが、その反動で虚空に弾き飛ばされて高速の錐もみ状態となった。背部に装着した小型冷蔵庫ほどもある船外活動ユニットから窒素を噴射してスピンを止めようと悪戦苦闘したが、地上での訓練通りにはゆかない。自身の回転による強力な遠心力が両腕を体幹から引き剥がそうとする。久しぶりに感じる大きな外力だった。これに抗ってなんとか側部から取り外したコントローラを胸元にセットしたが、半規管ばかりか頭部の血流までも異常となり、ＩＳＳからの音声通信がほとんど理解できない。演習での操作を記憶の中から必死に手繰り寄せたが、思考回路が寸断されたかのように、噴射の制御ができない。これほどの高速スピンは体感訓練の想定外だった。肉体は正中線から三〇度以上右前方にずれた斜めの軸を中心に高速で回転していた。そして

意識が、跳んだのだった。

試行錯誤がどれほど長かったかは記憶にない。今は周囲の状況を見回せるほどに身体の回転が緩やかになっている。

太陽から目を逸らし、我に返ったところで新たに底知れぬ恐怖と対峙することになった。ゆっくり回転する視界の中にＩＳＳは、いやそれと見まがうような光点さえ見当たらなかった。改めて自分が闇の虚空に身一つで浮いていることに気付いたのだ。宇宙服フードの中だけが明るく、外は果てない暗黒の虚空だ。視界の全方位に無数の小さな光点が、瞬きもせず、ただそこにある。粉ガラスを撒いたような銀河系の大きな帯が横たわり、他にもあらゆる方向に無数の光点がある。だが光は闇を照らさない。ただ黒紙に空けた針穴のようにじっとこちらを見つめていた。機器モニターの電子音と自分の呼吸音だけが聞こえる。

満天の星は地上で見てこそ美しい。今ここにあって私を遠くから見つめる微塵のごとき無数の光点は、絶望的なほどに冷淡虚無の化身だ。ＩＳＳからの受信は途切れていて、聞こえるのは自分の呼吸と機器のモニタ音だけだ。途絶前のアドバイスも、通話のメモリ機能がないのでわからない。どうしたらここから「脱出」できるのか。いや、『母』なる地球に還れるのか。ここから「生」の世界に戻りたい。体中の全ての細胞が叫んでいた。パニックに引きずり込まれそうな自分を押さえ込み、ひとつ深い息を吸いこんだ刹那、底知れぬ『孤独』が体の芯を侵食した。無限に広がるこの虚空には、一匹の虫はおろか、草の一本さえも生えてはいない。生命の存続を拒む強烈な放射線の脅威もある。無の世界、死の世界。いや世界という言葉さえ拒否する虚空だ。あらゆる生命からの完全なる孤立だ。絶対的な孤独だ。口を大きく開いて嗚咽が爆ぜて絶叫したくなるほどの絶望的な孤独だった。

『ごめん。還れないかもしれない。』　閃光のように妻と子供たちの顔が脳内のスクリーンをよぎった。宇宙飛行士になる決意の背中を押してくれたのは子供たちだった。『パパ頑張れ』『貴方ならきっとできる』妻も最終選考で渡米するまでは積極的に応援してくれていた。だが最終選考を通って一家で米国に移り棲み、本格的な訓練に入る頃から少しずつ不安を口にするようになった。その不安は不満になり、米国での家族の生活は二年足らずで分解した。帰国したいならそうしてもいい。だが、離婚はしない。そう伝えた。悲しみと困惑と不安とそして小さな怒りとがモザイクのように妻の顔を描き、笑顔が思い出せなくなった。

妻は何かを疑っていたのかもしれない。口にはしなかったが。だからこちらも釈明しなかった。仲間との出来事を話すたびにいつも、ビデオチャットで映る表情がぎこちなくなった。

『私もアストロノーツの一人として、あなたの成功を信じている。』そう言って送り出してくれたアンナの顔が浮かんだ。生化学者である彼女と機械工学出身の私とは思考回路が違ってしばしば衝突はした。だが双方が融合したアイディアには周囲も認める素晴らしいものもあった。惹かれ合ったのも自然だった。

『次の休暇は日本に帰らない。』

そう告げた時、妻は硬い声でただ『そう』とだけ答えた。一年半ぶりに子供たちの顔も見たかったし、近況も知りたかったが、既に通話は敬遠されていた。たぶん妻はアンナとの関係を疑っていたのだ。だが厳しい訓練の日々の中で、私とアンナが個人的に付き合うような時間はなかった。とはいえ殊更にそれを言うのも憚られた。

「『プラトニック不倫』っていうのよ、日本人はｗ」

以前、日本人の『不倫好き』を嗤うお喋りの中で、日系人の女性スタッフ、ケイがそう言った。結婚している者が他の異性に対して、肉体関係はないが、心を奪われている状態のことらしい。政治倫理をはじめ司法、行政から企業、学校等々にいたる大きな倫理問題より、芸能人やスポーツ選手など有名人の「浮気」を『不倫。不倫』と何週間もメディアが騒ぐお国柄だ、と。

「バカみたいじゃない、ふだん教会なんか行かない、聖書もろくに読まない人たちが、結婚式でだけ十字架の前で生涯の愛を『神』に誓って『倫理』の証にするなんて。『神』も笑うわねｗ」

「そもそも倫理ってなんだろ、唯一無二じゃないよね、常に複数形ethicsだし。道徳moralと違ってさ」とカールが言う。「東洋じゃキリスト教的倫理観なんて借り物なんじゃない？」

「パートナー以外の人には目もくれず、なんてとてもできないよ。ラブリーな歌手やセクシーな女優、身近にだって好意をもつようなひとがいるかも知れない。それが目に入らないふりしなくちゃいけないなんて、不自然だし、おかしいよ。」とボブ。

「モルモン教はどう？　キリスト教だけど一夫多妻だろ？今は違うみたいだけど」カールが茶化すと

「イスラム教では四人まで妻を持てるけどルールが厳格らしいよ、全員に平等の愛と処遇を、とかね」私が言うと、カールは

「オレは四人も妻が持てる国が羨ましいとは思わないね。ひとりでもう沢山だ」

ケイが切り込んだ。

「それってどっちも一夫に対する多妻じゃない。妻の方

はどうなのよ。イーブンじゃないわ」
「女性にも複数を愛する権利だって、快感を求める権利だってあると思うよ。」とボブ
「日本には女性向けのセックスマッサージもあるって聞いたわ。どうなのジョー？」
私は返答に困った。
「いっそのこと多重婚を認めたら？」オランダ人のノラが言った。
「ポリアモリー・・・・？」ボブが呟くとカールが
「ポリアモリーだって倫理もルールもあるよ。誓い合ったグループの外は恋愛禁止だ」と説明した。「そこには心身分離論で許される自由恋愛はない」
「一番大事なのは当事者間で了解し、平穏に生活できること・・・」とケイ。「そう、ソコなんじゃない。普段の生活が軋むようならアウト。順調ならＯＫ！ってね。」
「気持ちこそが重要なの。身体のことは外で食事したり、トイレ借りるのと同じよ。嫌だけどね。でも心はいつも私を想うべきだわ」とノラ。
公認の売春街がある国ならではの発想なのか。ノラは自分が「家庭の枠外」で惹かれ合うことがないという自信があるのか。「夫婦がお互いを思い遣らなくなったら、ダメよ。それは裏切りね」
思い出した情景の中でアンナの横顔は辛そうだった。
『君はどうなんだ』妻にも聞いてみたくなった。愛おしく、しかし接する距離を計りかねる妻の顔が浮かんだ。なぜ思い浮かぶ情景がみな朧気な動画なのだろう。
とりとめもなく蘇る、漠とした情景を振り払い、何かにすがるように制御パネルを掴んで分厚いグラブ越しのもどかしい指使いで少しずつ少しずつ姿勢を変えた。
足元からゆっくりと巨大な光が現れた。それは視界に収まりきらないほどの瑠璃色の球体、「地球」だった。
まだこんなに近くに居る！そして、私はまだ『生きている』
我知らず涙が湧いた。
宇宙服ＳＳＡに護られた私はもちろん熱は感じないが、背後の太陽からは生命の存続を許さない放射光が降り注いでいる。だが青く輝くあそこには確かに『いのち』がある。
正面に見える地球は今、昼時間。白い方解石が刷毛塗りのように紛れ込んだ巨大なラピスラズリの球のようだ。大洋は瑠璃色に輝き、大陸は黄土色の砂漠と緑の大地、頂には白雪を纏う高山。白雲は赤道に沿って流れ、蛇行し、各所で渦を巻く。今、私の視界の大半を占めているこの虚空に浮かぶ水の巨球は、確かに生きている。息をしている。

ただ単に自分自身の『生存』を感じられただけではなかった。私を封じ込めている無限大の闇の中で、ただひとつ、体温を放射している巨大な生体に思えた。理由も形もない温かさが私を包んでいる。漆黒の中で輝くような大きい球体そのものが、一つの生命体としてのエネルギーを、確かに発していた。自分がその中にいたこと、その巨大な『生命体』の一部であったことの幸運と幸福とが一挙に沸き出て、羊水のように私を包み込んだ。身体が個々の細胞に、分子・原子にまで分解されて包み込まれたように思えた。
『おまえはワタシの一部。その命はこの球の一滴』
ふと脳内にそんな音にならない『声』が湧き出した。これは地球からのメッセージなのだろうか。明確な言語ではない想念。現(うつつ)に溶け込んだ明け方の夢のような感覚だった。人はこれを神意と呼ぶのかも知れない。
『力の限り生きよ。生命はまた巡る』
一瞬とも、永遠とも言えぬ、穏やかな忘我の時が流れた。“悟り”というのがどんなものかは知るよしもないが、私の中でなにかが変化した。
『絶望とは愚か者の結論だ』　十八世紀の政治家の言葉が希望を紡いだ。
幾ばくかの冷静さが戻り、弾き飛ばされていたさ中に垣間見た地球の大きさも想起した。現在の地球の大きさから考えて、ＩＳＳが電波も届かないほどの遠方に居るとは思えない。地球の向こう側、つまりこちら側から見れば「蝕」の位置に入ったのだろう。幸い通信機器自体も壊れていないようだ。ワイヤーが切られた時のＩＳＳの速度と方向、太陽の位置などから考えて、早晩、通信は再開される、と考えた。
地球からの離隔はやや治まっているようだ。満天の、いや全方位万端の星空に包まれつつ宇宙の果てまで飛ばされるような危機は免れたのだ。と、すれば、次は地球の引力に捉えられて『落ちてゆく』危機も考えねばならない。いずれにせよＥＭＵの酸素と電力が残っているうちに、生存可能な空間に逃げ込まねばならない。
ＩＳＳへのコンタクトを試みようと計器を見た。船外活動終了から八十二分。ＩＳＳの地球周回は一周約九〇分なのでそろそろまた通信ができるはずだ。時間を忘れるほど必死に非常信号を送った。
突然ヘッドフォンから電子音が鳴った
「Ｐ！Ｐ！Ｐ！　ＪＣ×××ＳＡＫＡＫＩ、応答を乞う、ＪＣ×××ＳＡＫＡＫＩ、応答を乞うＰ！Ｐ！Ｐ！・・・」
ＩＳＳからのメッセージだった。果ての見えない悪夢から意識の中にか細い覚醒の光が差し込んだ。通信の途絶は

やはり、ステーションが地球の陰に入ったからだった。思わず叫んだ。

「こちらＪＣ×××、ＳＡＫＡＫＩ　聞こえます」

「Ｊｏｈ！聞こえるか。無事なのか？」　その声の背後に歓声が聞こえた。

「無事・・ではないが、無傷です。こちらの現在位置の確定と今後の軌道予測をお願いします。」

全天、というのも妙だが、全方位の「星空」をＴＶカメラから送信した。地上の天文台や歪みのないハッブル・テレスコープの映像から計算して、キロメートルレベルでの位置は分かるだろう。ハッブルは打ち上げからもう四十年ほど経つが、まだ働いてくれている。これらから経時的な位置情報を送れば軌道計算もできる。現状、地球の引力圏内にあるのは良しとしても、自分の軌道が、放り出される運命の放物線なのか、永遠に回り続ける円なのか、はたまた円にしても漸次縮小するものなのか。そのどこでレスキューとコンタクトできて、生還の道が開けるのか。幸運を祈った。

バッテリーの消耗を防ぐため、一旦通話を切った。長い長い、長すぎる二時間が経った。地球は徐々に大きくなり、また遠ざかった。だがその間、高度２７８から４６０キロメートルの軌道をとるＩＳＳとは目視できる程の『すれ違い』は起きなかった。

百二十八分後に再開されたＩＳＳからの通信には、よいニュースと悪いニュースがあった。

計算結果では運良く地球を巡る、やや楕円の軌道に乗っているようだった。暗黒が支配する無限の彼方に弾き飛ばされる虞だけはなくなった。ただその径は次第に小さくなるという。

ＥＭＵの呼吸環境で許される時間はあと三時間ほどしかない。

「まず残念な情報からだ。あらゆる可能性を計算したが、Ｊｏｈ！　君をこちらが回収することは不可能だ。」計算ではＩＳＳとの再接近最小距離が数十ｋｍ以上あるという。

「知っての通りＩＳＳの脱出用小艇には長距離航行に十分な燃料はない。無論、君が装着してるＥＭＵの噴射能力では、これから軌道を修正してもとてもコンタクトが無理だ」という。「それにＪｏｈ、残念だが地上からの**レスキュー・ロケット**は準備が間に合わないそうだ。」

逃げ道が塞がれた。

「だが、希望はある。一昨年、ＡＢ・マスクが立ち上げたエックスペース社の無人貨物ロケットの未回収機だ。」

それは１年ほど前に地上からの操作が不調になって再始

動できず、地球への帰還ができなかった船だ。ＩＳＳへの実験機器搬入を終えて切り離した後、帰還軌道への投入ができなかった。今、ＩＳＳより平均十数ｋｍほど外側の軌道を回っているが、軌道修正の制御が困難なためやがて地球に落下する運命にある。使命を終えたＩＳＳが大気圏突入の高熱で処理される運命にあるのと同様に、燃え尽きる残渣の洋上落下を誘導しなければならない。その対策が練られている最中なのだ。今、その貨物船を捕捉して始動すれば帰還の可能性がある、という。ハッチはＩＳＳと同等のメカニズムなので解錠はできるだろう。ただ機体の飛行やキャビン内の制御ができるかは別問題だ。

蜘蛛の糸よりか細い一縷に帰還の望みが繋がりそうだった。虚空を周回する『幽霊宇宙船』をどうやって捕捉するか。こちらとあちらの周回軌道を精密に把握して、ドッキング可能なポイントへ私も緊急用推進装置ＳＡＦＥＲの窒素ガス噴射で向かわなくてはならない。それには両者の動きを正確に把握したうえでの精密な計算が必要だ。ゴダード宇宙センターのスーパーコンピュータで解析するために、ＩＳＳ経由でこちらの位置を逐次知らせる必要があるが、双方が地球の蝕に入らぬうちに頻回に通信する、そのための電力消費が小さくはない。電源の消耗を抑えるため音声通話は控え、電波送受信の間隔も広げた

「計算の結果が出次第、連絡する。信じて待て」船長からのメッセージは頼もしくも亦、限りなく厳しくも聞こえた

再び、大きく静かに輝く地球を見つめながら、瞬かない星々が散らばる虚空の暗黒を飛翔する孤独が始まった。自分の生存を確認できるのは、自らの呼吸音と装備がすれる微かな雑音、それに送信を知らせる十二秒ごとの短い電子音だけだ。だが次第にその間歇音が時計の振り子のように微睡みの沼に誘いこむ。

視界の正面にある地球のこちら側は今、夜。その縁が薄く虹色に輝いている巨大な黒球だ。大陸沿岸や島々の都市が放つ灯りと、散発的に瞬く雷光が、この星での人と自然の“活”を主張しているようだ。その地球が今、太陽の全ての光線から私を護ってくれている。その周囲に目を向ければ、黒羅紗に金沙を撒いたような豪奢な銀河と、それを囲む暗黒、まばらに空いた針穴ほどの光しかない虚空がどこまでも広がっている。美しい、というより、畏怖が迫る。海辺で愛でる「海」と、海中で触れる「海」の違いに似ていた。抱擁、と言うより呑込まれたような感動と、圧力だ。

なにかおかしい、と感じ始めたのは、三度目のコンタクトを待っていた時だった。ＩＳＳの軌道とこちらの合流ポイントの計算を依頼するために、レーザージャイロのデー

タを送っていたのだが、自動送信されている現在位置の口頭確認ができなくなった。ディスプレイ表示されている数字が分からない。「見える」が「読めない」のだ。

「数値確・認困・難・の。ため、そ・らか・のリモー・ト・・でお願・し・す」

脳の認知能力が確実に低下していた。酸素は、逸失がなければ8時間分はあるはずだ。設計上、特段、有毒ガスが発生する懸念もない。とすれば吸収ユニットの効率が低下して給気の二酸化炭素濃度が上がり、CO2昏睡のリスクが高まっている、ということだ。酸素消費の増大を覚悟してその分圧を上げねばならないが、調整は微妙だ。

「大丈夫だ。コンタ・・イント・・〇算は・・〇・・・、大〇夫」

ＩＳＳからの通信が次第に途切れがちになった。また地球の蝕に入ると直接交信ができなくなる。ＩＳＳからＮＡＳＡと通信衛星を経由した交信はタイムラグがあるし、万全ではない。不安なまま放置船コンタクトへの最終ガイドを待つことになった。

二酸化炭素の分圧はまだ下がらない。宇宙“服”というパッケージの中では、“快適”環境が保たれている。適度な圧力だけが“全身”を包みこみ、身体に対してあらゆる方向からの引力がない。汗さえかかなければ、今は快適至極だ。そんな万全の身体的快適とは裏腹の、頼りのない不安感が背後から靄のように上がってきた。意識がゆっくり霞んで微睡みの淵に誘い込む。

『わたしたち夫婦じゃないみたい。』ある朝、出がけに突然、妻が言った。『だって・・』

病気がちの妻は結婚当初からとくに身体のことにとても繊細で、そのさ中も翌朝も不安と不調からのクレームが多かった。やがて日常の会話でもテレビや新聞記事でも、性的な話題への嫌悪感が強く現れるようになった。私も労りと苛立ちとから、求めることがなくなっていたのだ。

セックスだけが夫婦の証か？ほかにもっと大事な繋がりがあるだろう。わたしたちは家庭を作り守り、育てている。君がそのか細い肉体から全てのエネルギーを絞り出すように子供たちをこの世に産み出した。血と体液にまみれた薄紫の頼りない生き物が、産声を上げて肌がピンクに染まってゆく刹那、爆発的な感動と君への深い感謝を覚えた。それから君とは子供たちとの絆も互いにしっかり握り締めながら生きている。これほどの夫婦の証はあるだろうか。夫婦以外との性交が禁じられていることと、夫婦が性交しなければならないことは対置的に等価なのか。その契約の下で他者とのセックスが禁じられるように、夫婦間でセックス拒否があれば契約違反になるのか。つまるところ結婚の核心は性交契約なのか。

『そんなことはないでしょ、ぼくらは・・』《愛し合ってる》という一言が喉に痞えたように感じた。

軽くハグしようと両腕を伸ばしたが、かわされた。妻はつ・と後ろに下がりくるりと背を向けてするりと服を脱ぎ捨てた。そしてその裸体をかばうように両腕を交差させながらこちらを振り向いた。嗤っているような、泣いているような、困惑に歪んだ顔。

イリュージョン。そう分かっていた。これまで蓄積し、沈殿して発酵した、あるいは腐敗した情念の結像。『ごめん』でもどうすれば良かったのか。今となっては。今となっては？？意識が墜ちて身体が深い星屑の闇に溶けてゆく感覚が襲ってきた。このまま『無』に還るのだろうか。

『起きて！』『大丈夫！』『貴方なら還れる』アンナの笑顔と声が脳内に浮かんだ。なつかしい彼女の、母音が強いニューヨーク訛りだった。『還ってきて！』

Ｐ――Ｐ――Ｐ――Ｐ――　電子音が受信を知らせた。

今は！そうだ、還らなければ！！　ＩＳＳからの呼びかけに応える。

「●●●　こちら●●●　計算結果の送信を！」

「いまから約九十二分後に廃船との距離が最小になる。現状の軌道では約一・二ｋｍの差になるので、今から指示する方向にＳＡＦＥＲの噴射で接近し、飛翔方向と速度を合わせて欲しい。」

噴射できる窒素ガスの残量から考えて、周回がマッチするチャンスは一度きりだ。今から加速してゆかなければ間に合わない。指示された方角に向けて噴射を始めた

九十分後、目標の機が遠くに見えてきた。小さい！と思った。サッカーコートほどのＩＳＳに比して、この宇宙船は二階建てバスほどの大きさしかない。それが今、自分と同じく秒速数キロメートルで飛んでいる。西部劇のヒーローが疾駆する馬から爆走する駅馬車に飛び移る、そんな映画のワンシーンが浮かんできた。目の前の現実はその何倍も難しく、危険だ。背中に装備したコンピュータは通信制御が主目的で、軌道計算などのタスクはＩＳＳに頼らざるを得ない。逐次指示を受けながら窒素ガスの噴射を調整した。このＥＭＵが旧型でないことに感謝だ。以前の型では複数の分割噴射ができなかったのだから。

「六〇秒前」ＩＳＳから噴射方向と速度の最終指示があった。

斜め前方にターゲットがある。頭部に装着したＴＶカメラで映像を送り、指示を受けつつ速度を調節した。自然減速がない真空無重力空間で加速しすぎれば、対象と激突す

る虞がある。

　船体が眼前に迫った。着船時にはＩＳＳからの離脱時に切断された一メートル半ほどのハーネスケーブルのフックを利用することにした。慎重に減速しつつケーブルを難破船のアンテナに引っかけ、貨物搬出口のハッチを捉えることができた。幸いなことに電気系統は生きていて、解錠コードが認識され、貨物室から操縦席に入ったが、船内の空気環境はＩＳＳへの貨物搬出時のままで、期待した酸素もほぼ無かった。そもそも船外活動用の宇宙服は一人では着脱できない。登山リュックほどに大きな生命維持ユニットだけを残し、付随する窒素噴射装置をはずした。大荷物を背負ったまま操縦席に固定されるのは困難で、危険でもあるが仕方がない。操縦パネルからＩＳＳとの通信を再開した。大気圏突入はこの機本来の帰還プランにならい、次の周回の最近点で降下軌道に入ることになった。この後やがて、船体の白熱化で通信不能になる。

　エンジンは共通コードにより問題なく始動した。降下軌道に入ると次第に速度が上がり、ＩＳＳの周回軌道、高度四〇〇ｋｍを過ぎた辺りから空気抵抗が増したのか、振動が次第に大きくなった。広い到達予想円を送信した。

「ＧＯＯＤ　ＬＵＣＫ！」

「ＴＨＡＮＫＳ　Ａ　ＭＩＬＬＩＯＮ！」

「ＳＥＥ　ＹＯＵ　ＳＯＯＮ！」

　一〇〇ｋｍを過ぎた頃からは速度がさらに上がり、体感する加速度Ｇも急激に大きくなった。船体温度が急上昇して発光し始めたか、コクピットが眩しいほどに明るくなった。

　大気圏への進入角度が大きすぎる。そう感じた。船体温度が計器の限界を超えそうだ。下手をすれば船体が空中分解しかねない。分解を免れたとしても、陸上への安全な帰還は不可能だろう。となれば海上への着水だが、その衝撃に機体が持ち堪えてくれて、しかも救援が来るまで浮いて待たねばならない。満身創痍でそんな幸運が重なることを、今は祈るしかない。

　操縦席にめり込むような重圧感の中で、背部に背負ったＥＭＵの制御装置からいやな音がした。これでCO_2濃度と体温の上昇は不可避になった。緊急用の酸素予備ボンベを開けてCO_2分圧の上昇と拮抗させたいが、酸素過剰になれば酸素中毒の虞も無くはない。着陸か着水か、いずれにせよこれから救出までの間、呼吸は維持できるだろうか。強烈なＧの圧迫と息苦しさとともに被服内の温度が上がってきた。再び正常な意識の崩壊が始まろうとしている。

　唐突に、薄明かりの茫漠の中から母の顔が浮かんできた。何かを言っている。声は聞こえないがその意思・意図が意

識の中に入ってくる。『まだまだ目一杯、思うように生きなさい』その後ろに父が見えた。『ベストを尽くせ』

『ここはどこなの。兄貴や妹の〇子は？』

『まだ来ていない』

『あなたもまだ来ないでね』

　これは脳が勝手作ったストーリーだ。数パーセント残る意識の片隅で、私は正気を取り戻そうとあがいた。幻影のストーリーは勝手に進んでゆく。狭い和室の仄灯りの中で、父と母が愛し合っていた。両親の性行為など、これまで考えたこともなかった。得体の知れない不快の朧の中から、私と妻の行為が浮かび上がってきた。冷や汗をかく間もなく、私が、そして我が子たちが産まれる瞬間となり、親子で初めて撮った写真が浮かび、やがて脳裏の映像はあの、母に向かって這い寄る私自身の情景に塗り変わった。

　小児期に見た不思議な夢がまた現れた。年老いた英国人の「自分」が古い灯台の窓辺から老妻を呼んでいる夢、後ろ手に縛られた僧侶の「自分」が深い穴の前で首を切り落とされる夢、石の手触りや潮風、土の匂いや後頭部に感じた衝撃。繰り返し現れた不思議な街、不思議な島・・・。脳のどこかにしまい込まれた感覚や映像が、つぎつぎ脈絡もなく浮かんでは消える。

　ＰＰＰＰＰＰＰＰ

　大気圏の下層に達して船体温度は更に上昇し、白熱してきた。自分自身、全身が発光しているように思えた。灼熱が襲ってきた。今、この船は、この私は、燃えているのだろうか。

『怖れることはない』　と、脳内にまた『声』が湧いた。

「あなたは？　神？」

その『声』はかすか、笑うように揺らいだ

『お前たちがいう《全知全能の神》ではない。全能ならば今の地球の在り様を座視していまい』

「それでは、『貴方』は？」

『生命の原点。そしてその想念。すべての宗教は、これを各自の解釈で言葉にしたもの。彼らは《覚者》《預言者》となり、その考えを説いて回った。自ら《経典》《聖書》を書いた者など居はしない。すべては後付けで、文言は時として不正確で、不誠実だ。私は一度として次代を作る行為を戒めよとも、《異端・異教・不信心の者》たちを虐待、殺戮せよ、とも伝えたことはない。』

　私の頭の中で『言葉』が紡がれた。

　『死を恐れるな。死は生に結ばれる。すべて生あるものは結ばれ、睦み合い、広く次代へ結ばれる』

　私を取り巻くすべてが燃えていた。燃えながら落下していた。

『ただひたすらに生きよ。死が訪れるまで』

この船は地上から見えるだろうか。流星のようにかがやいているだろうか。

愛する人たちよ。私は還れるだろうか、君たちの輪の中へ、また永遠の輪の中に。運が良ければ明日には私の何がしかが彼らの元に還るだろう。

すべてが　燃えていた。